

郡司は常に＋1も－1も0にさせたがった。それほど、貸し借りをそのままにするのを嫌がった。0にしなければ納得できないタチなのだ。誰かに何かをしてもらったらずくに何かを返した。逆に、代わりに誰かに何かを先にしてやったら、何かを求めなければいけない。さすがにそれは図々しいと自覚のある郡司は、めったに自分から施しを与えないようにしていた、与えられたら与える。与えられるまで与えない。それを何よりも郡司は仕事や睡眠、食事よりも大切にしていた。

例えばこんな具合だ。天気の良い土曜日、せっかくなので外で昼食をとろうと弁当をこさえて郡司は家を出た。大きな公園の原っぱの隅にシートを敷いて陣取り、弁当を広げた。

ところが蓋を開けたらすぐさま、ケチャップを忘れたことに気づいた。郡司はホットドッグが好きだった。しかしケチャップがなければつまらない。貸し借りの次に、郡司はホットドッグのこだわりうるさかった。落胆の声を上げた。

それを見ていたのは、すぐそばのベンチにいた少年だった。少年が一人、弁当を食べているのを郡司は目ざとく見つけた。パツと視線が合うと少年は委縮したが、郡司はすぐにそばに寄ってきた。

「きみ、ケチャップ持っていないかい」悲しきかな三十代の男が苦渋の表情で小学生に迫る仰々しい光景だったが、運よく少年はケチャップを持ってきていた。

「ハンバーグに使うつもりだったんですけど、まあ、少しだけなら……」きんちゃく袋からケチャップを一袋取り出した。少年に違和感を感じ、そのまま郡司は隣に座った。

「ありがとう……。きみはできたにんげんだな……」

「いえ、お構いなく」ケチャップを手に入れるだけで郡司は気を取り直した。

「きみ、一人でここにいいのか」

「……」

「お兄さん、怪しい人じゃないから安心してくれ」

「怪しくない人はそんなこと言わないよ」

「確かに」郡司は自分で納得した。少年はおかしくなって笑ってしまった。

「ごめんなさい、ちょっとからかっただけさ。一人で来たよ、ここは」

「友達はいないのか」するとまた少年は表情をくもらせてしまった。遊具で小さな子とその親が遊んでいた。郡司はホットドッグにケチャップをかけながらそんなのかな公園の風景を眺めていた。

「何か嫌なことでもあったか。なんでも聞いてやるぞ、ケチャップの借りがあるからな」

しかしケチャップに見合う『お返し』はどれほどのものだろうかとも考えていた。多く与えずぎると、相手も慮ってまた返してくることがある。その調整が大事だった。郡司は常に、H0を追求していた。それから少年はうつむきながら、ちょっとずつ話し始めた。

「僕はいつも内気でうまく人と話せないから、友達はいないよ。いないから嫌なことあ

りやしないんだ。だから学校も大丈夫なんだよ。だけど……来週、ヴァイオリンの発表会があるんだ。それが嫌なんだ」

「それが弁当を食べない理由か」

「え？」

「さっきから少しも箸をつけてないじゃないか。親に作ってもらったんだろ？ケチャップも全部俺が使っても文句も言わない。食べないなら俺がもらうぞ」またまた少年の表情がくもった。

「母さんはいないよ。この前死んじゃったんだ。弁当はおばあちゃんが作ってくれた。でもやっぱり、いつも発表会に来てくれる母さんはいない。おばあちゃんは足が悪くて遠くまで来れないんだ。発表会はいつも母さんが花束を持ってきてくれてた。きれいな花束。がんばったねって、僕の順番が終わると花束を持って待ってくれてるんだ。けどもういない。母さんがいなくなってから二回発表会をやったけど、もう寂しくて嫌なんだ」郡司はほどほどにひねくれた性格なので、少年の話を聞いてから、ずいぶんと贅沢な悩みを抱えた坊ちゃんだと訝しんでいたが、その斉菱差は本当だと思った。その本当の気持ちを郡司は見過ごせない。

「確かにそれはつらい。よくがんばったな」手癖でタバコを取り出そうとしてから、子供のいる公園にいることを思い出して止した。

「ケチャップの『お返し』だ。俺が花束を持っていこう。いつ、どこでやるんだ？」少年はサツと輝かせた顔を上げたが、すぐにそらして暗くなった。

「来週の土曜日の港区の音楽堂だけ……、そこまでしなくていいよ。お兄さんは知らない人だし、なんだかキマリわるくなっちゃうな。話を聞いてくれただけでもうれしいよ」それから黙って二人で弁当を食べた。公園を眺めて、遊ぶ子供を眺めた。それと二人の間には壁があり、遠い世界で起こっている出来事を見ているような気分だった。

途中、溜まったものが溢れたように少年が涙を流し始め、郡司は背中を撫でてやった。少年は泣きながらも弁当を食べ続けた。子供の慰め方の知らない郡司は水筒に入れてきたコーヒーを勧めたが、苦手だったらしく、一口でむせてやんわりと突き返された。

## 二

郡司のその性格は、父親から譲り受けたものだった。税理士をしていた郡司の父は、とにかく数字と計算にうるさかった。税金から電気料金まで、その内訳の全てを知りたがったし、郡司の成績、入試の倍率も知りたがった。そんな父親の生活を見ながら成長し、郡司の価値観は育まれた。物心ついたころから数字さえあれば暇しない性格になり、友人を作ろうとしなかった。計算の都合の合わないことが多すぎるからだ。友人がいらないという共通点こそが、郡司が少年に対して親近感を抱いた所以なのかもしれない。

唯一の郡司の友人は今、花屋を営んでいる、見ソロという女性だった。みそろとは親同士が仲良く、幼い頃からの仲だった。気難しい郡司を理解できる人間などほとんど存在しなかったが、みそろは郡司にいつも良くしていた。

公園の帰り、少年と別れ、郡司はみそろの店に寄った。頼んだのはもちろん花束だった。

「郡司君が花を買いに来るの、珍しいね。いつもはおしゃべりか愚痴ばかりかでなにも買ってくれないくせに」フンと鼻を鳴らしたものの、郡司は何も言い返せなかった。

「どんなものがいいの？」そう訊かれて郡司は困った。具体的な希望を聞いていなかった。

「お前の一番を、とびつきりを作ってくれればいいよ。イメージは……そうだな……なんか……寂しさを埋めてくれるような……大切な人におけるような感じ……だろうか……」メガネをいじりながらメモをしていたみそろはそこで顔を上げた。

「郡司くん、彼女できたの」

「ちがう、そうじゃない、子供にあげるんだ。発表会があるんだってさ」数秒の間、お互い黙って見つめあい、それからまた動いた。

「なるほど……ね……まあ、君を好きになつてくれる人なんて、そうそういるわけないわな……」また鼻で笑ってあしらったが、何も言い返せなかった。

「土曜の朝に来てくれれば、それまでに作っておくね」

「それじゃあ、また来週」と言つて郡司は店を後にした。

### 三

そして次の週の土曜日。郡司は七時に目覚めた。軽く朝食を済ませて、フオーマルになりすぎないカジュアルな服装で整えた。一人で頑張る少年への礼儀として。それから髭を剃り、革靴を出して家を出た。みそろの店に着いたのは十一時過ぎだった。みそろは嬉々として待ち構えていた。

「子供のためなら、私もがんばらなくっちゃと思つてね、言われた通りの、とびつきりさ」花束を紙でやさしく包装し、紙袋に入れて差し出した。みそろの手が荒れているのを郡司は気づいた。ころなしか、顔もやつれていた。かけるべき言葉を探したが、きつとみそろはそれを嫌がるだろうと思い、やめておいた。

「ありがとう。きつとあいつも喜ぶだろう」紙袋の中を確認して言った。

「それじゃあ……渡せたら報告しに来てよね。気をつけてね」

「もちろん。なにがあつても絶対届けるさ」それを聞いてみそろは笑った。

「なんだか大げさだな」眠そうに笑った。

屋食は花屋のすぐ近くの蕎麦屋で済ませた。しかし、それが間違いだった。駅周辺は人であふれかえり、すぐに異変に気付いた。人身事故で電車が遅延しており、郡司は舌打ちしながらすぐに時刻を確認した。今は十三時、発表会の開始は十四時だった。時間が迫っている。しかし電車は乗らざるをえないのでそのまま改札を通った。

ホームにも苛立った人ばかりだった。音楽堂の最寄り駅まで九駅あった。頭の中で時間の計算を試みたが、始まる前にはぎりぎり到着しそうだった。しかし電車が来るまでにかなしの時間が経っていた。

騒々しいアナウンスが流れてくる中に電車が遅れてやってきた。まったく今日はない、と思いつながら電車に乗った。ポケットから手を出す拍子にライターがこぼれ落ちた。

扉が閉まる。落としたことに気づき手を伸ばす。電車が動き出す。ライターに触れる前に、別の男がライターを拾った。それには少し、いやかなり、郡司には理解できなかった。郡司が頭を上げる頃には、男は片方の手でタバコを取り出し、火をつけていた。

「ぼっちゃん、ありがとな」と言って煙を吐き出した。乗客は皆、そ知らぬふりをし、また何人かは車両を移動した。誰もが異常な人間だと感じていたが、郡司が最も危惧していたのは、男にライターを貸す、貸しを与えてしまったことだった。今すぐ借りを徴収しなければいけない。

車内の座席はまばらに空いていたが、男は座ろうとはしなかった。吊革に両手をつっかけ、煙草を口にくわえて嬉々とした表情で窓の外の景色を見物していた。確かに見物したくなるほどの、良い天気だった。雲一つなく空が広がり、川には太陽が煌々と反射している。思わず電車の中でタバコを吸いたくなるような、そんな天気だ。

「あ、あの、すみません、たばこやめてもらえませんか」と切り出したのは男のすぐそばに座っていた、学ラン姿の若い学生だった。男は何も答えず、煙草を味わい続けていた。

「で、電車のなかって禁煙のほうですよね。ここで吸っていいはずがないですしね、め、周りの人に迷惑ですよ」学生は怯えきっていたが、言いたいことは言えたようだった。恐れからか、自分でも言えたことに戸惑っているようでもあった。

さて、男はというと、大きな煙を一つ吐くと、右手にタバコを取り、ようやく学生へ向き合った。わざわざ学生の視線の高さまで頭を下ろして凝視した。その体勢から、男のたくましい筋肉がよくわかった。学生はますます震え上がった。

「俺が好きですっていると思うか？禁煙の場所で吸いたいと思うか？答えてみるよ」学生は質問の意図がわからず、ぶるぶると震えていたが、しっかりと答えた。

「そ、な、そうじゃなかったら、なんで吸ってるんですか？あなたは吸いたくて吸ってるんですよね？」そこから静まり返った。電車の進む音だけが響いていたが、電車は一向に停車しない。次の瞬間、男のけぞって笑い始めた。

「そう、そうだな、俺は好きでここで吸ってる。お前の言う通りさ」会話の訳が分からず、聞き耳を立てていた人は皆、混乱した。学生も混乱した。男は笑い続けた。タバコは未だ燃え続けた。そこで突然郡司がタバコを奪い取り、握り潰した。火は消えた。

「火は返してもらどうぞ、これで0だ」男は笑うのをやめ、郡司を凝視した。郡司は毅然とした表情で視線を返した。

男がおもいっきり郡司の顔を殴ると、吹っ飛び、花束がつぶれないように庇って倒れた。郡司は立ち上がると、もう一度男に向き直った。鼻血が出ている。なんで逃げないんだろう、と学生は気が気でない。

男は挑発的な素振りで、郡司が殴り返してくるのを待った。乗客も学生も、固唾を飲んで見守っていた。郡司は……。郡司は静化に男に近づき、胸ポケットに手をつっ込んでライターを取った。電車が原則を始めた。

「これは殴りの借りの返しだ。お前がタバコを何本吸おうが、つかまろうが構わないが、

殴らなければこれはくれてやったのにな」納得しない男、学生、乗客をよそに、電車は止まり、郡司は降りた。ホームの喧騒に入ってまた舌打ちした。一駅しか進んでいない。これ以上電車でもめ事をしてると時間が無くなると思い、タクシーを拾うことにした。改札への階段を降りる最中、やっと鼻血に気づいた。

#### 四

駅を出てすぐタクシーを探した。ロータリーの脇に一台止まっていた。手を上げると扉が開く。乗り込む。

「音楽堂まで」と一言伝える。発進する。一息吐いて、郡司はとりあえず落ち着く。

タクシーのフロントガラスは丁寧に磨かれており、日差しが車内に差し込んでいた。視線をずらすとすぐに運転手の札が見える。『吉葉秀夫』。

「俺の名前は野坂郡司です」と告げた。運転手はバックミラーに視線を走らせた。バックミラー越しに目が合う。

「……どういうことですか？」運転手が尋ねた。

「俺はあなたの名前を知った。だからあなたに俺の名前を知らせる。これで貸し借り0だ」運転手は閉口した。会話が途切れる。メーターが切り替わる音がした。そのまま沈黙を空けた。

「あとどれぐらいで着きますか」郡司が尋ねる。

「三十分ほどかと」郡司は質問しようと口を開いたが、ちょっと迷ってから止した。メーターが切り替わる音がした。手持ちの金が足りるか心配になった。メーターが時間で動いているのか、距離で動いているのか、気になったがそれも止した。交差点で右に曲がった。

「運転手さん、道間違えてませんか」運転手は答ええない。そのまま進む。メーターが切り替わる音がした。

「聞こえてますか？工事をやっているわけでも渋滞してるわけでもない。もう一回言うぞ、方向がおかしいぞ」また運転手は答ええない。タクシーは進み続ける。メーターが切り替わる音がした。時刻を見る。十三時四十分を過ぎていた。

「お前、ぼったくりか？こっちは忙しいんだ、これが最後だ、引き返せよ」郡司の後頭部に鉄の感触があった。メーターが切り替わる音がした。続けて撃鉄を起こす音がした。

「ぼったくりじゃなくて強盗さ」タクシーは進み続ける。メーターが切り替わる音がした。

「まず財布を出せ。別のモン出したらどうなっても知らんぞ」郡司は左手を上げ、右手でポケットから財布を出した。ようやく運転手がしゃべった。

「お客さん、タクシーは気をつけた方がいいですよ。近頃はこういう輩がふえていますから……。まあ、私たち以外に同業者がいるのかはわかりませんが……」淡々と言うと、後部座席にいる男は変な笑い方をした。

郡司は時計を確認した。もうすぐ発表会が始まる。

「お前、やけにキマった格好なんてしちゃって、花なんて持って、張り切ってたのに残念だったな」と言って銃で紙袋を小突いた。紙袋が倒れる。メーターが切り替わる音がした。男

は盗った財布を紙袋の上に放り出した。それを郡司は見逃さなかった。

「俺は全部をH0にしている。貸しを受けたら借りを返す……ってことさ。さつき電車に乗っていたら男が俺のライターをパクってタバコを吸った。これは貸しだ。俺はそいつのタバコの火を消してやった。これは借りだ。それから男は俺をぶん殴った。この血はその時のものだ。これは貸しだ」すると二人は嘲笑った。

「ついてねえのなお前！ ずっと変な奴に付き合わされてよ、同情してやるよ！」後部座席の男を郡司は無視した。

「それから俺はライターを取り返した。殴りの借りだ。俺が生んだ貸しはすぐに返す。けどな、相手が先に貸しを発生させたらすぐに借りなければいけない。どういう意味か分かるか？ なんて俺が火を消してライターを取り返したかわかるか？」そこまでしゃべって後部座席の男に殴られた。

「お前、面白いやつかと思ってしゃべらせてもなんもおもしろくねえな。いい加減黙りな」メーターが切り替わる音がした。

「俺の貸しは俺の気持ちの問題だ。けどな、相手のが作った貸しは俺の気持ちの問題じゃない。何もしなければ自動で引き落とされるんだ。これはただの痴話話じゃないぜ、警告してるんだ。わかるか」さすがに苛立ったらしく、運転手がこちらを見て怒鳴った。

「いい加減にしろ、そろそろうるさい、黙ってろ」

「おい、前見て運転しろよ」と後ろの男が不安げに言った。メーターが切り替わる音がした。郡司は黙らなかつた。

「俺がタクシーに乗ってから、お前たちがしたことを覚えているか？ 財布を取った。殴った。それだけじゃない、紙袋を倒して潰した。貸しを作りすぎだ。俺はもう警告したからな。どうなっても知らないぞ。どこかに捕まっておいた方がいいかもな」そう言って郡司は足を前の座席に踏み込んで身構えた。再び運転手が切れて郡司へ振り向き怒鳴った。

「お前、限度ってもんを」その瞬間、車内が影に覆われ暗くなった。メーターが切り替わる音がした。次の瞬間、タクシーはトラックに突っ込み、何回か横転してひっくり返った。

## 五

郡司は時計を見る。十分ほど気を失っていたようだった。タクシーの残骸の隙間におり、身体の節々が痛んでいた。すぐに紙袋を確認した。汚れてしまったが、奇跡的に花は潰れていなかった。ので安心した。が、急がなければいけない。

郡司がタクシーから這い出てくると、周囲からどよめきが起こった。大丈夫か、救急車読んでるからじっとしてないと、という声をすべて無視して、足を引きずりながら歩き始めた。音楽堂まで歩いてに十分ほどだろうと目算した。発表会はもう始まっている。

そのころ、音楽堂の控室では、少年が暗い表情で出番を待っていた。発表会が始まる前に、座席をくまなく探したが、郡司の姿はなかった。あまり期待もしていなかったが、それでもつらいものだった。ノックをして扉が開き、係員がやってきた。

「きみ、次の次だから移動しなさい」ため息を一つついて、少年は席を立った。

郡司はもうろうとした意識で、心もとない足取りで音楽堂を目指していたが、間に合うはずもなかった。それから自分の主義を憎んだ。強盗に話した通り、郡司の始めた貸しは、郡司の気持ちの問題でしかないのだ。ケチャップの借りを引きずるのもただの気持ち、少年の寂しさを憐れむのもただの気持ちだ。

信号が切り替わり、立ち止まった。呼吸が浅く、紙袋を地面において呼吸を整えようとした。額が温かく、何かと違って触れると血が流れていた。鼻血に頭から血、全身あざだらけ、满身創痕になっていた。そんな状態でも、紙袋の音は逃さなかった。見ると紙袋はなくなっていた。周囲を見渡すと、自転車の男が紙袋を持っていた。それがひったくりだと気づくまでに時間がかかった。それから貧血で膝から崩れ落ちた。頭が地面に着くまでの、一瞬の間に、いろんなことを考えた。とにかく自分を納得させようとしていた。

花束は別のところで買いなおせばいいじゃないかと思った。が、それと同時に、見ソロのことを思い出した。やつれた顔、荒れた手、眠そうな声。一週間で花束を作るのに、そこまでするのか？と考えた。しかし……それほどまでにすることなのだ、とも考えた。そのみそろの気持ちを考えた。

それからみそろの気持ちに対して、郡司の気持ちは釣り合うか、考えた。この瞬間まで、ひどい思いをして、厄介ごとと巻き込まれた。とうてい釣り合わないだろうと思った。H0にならなければ、途中であきらめるべきだ、相応の分まで支払ってそれで終わりだと思った。しかしみそろの顔を忘れられなかった。H0にすれば楽かもしれないが、釣り合わないこともある、それ以上に大切なこともある、と思った途端、力がみなぎった。

すんでのところで体勢を整え、身体を起こすと、自転車までの距離を見切って走り出した。しかしこちらは手負い、いつ倒れてもおかしくはない状態で、思い通りに身体を動かせるはずもなく、自転車の追いつけるはずもなかった。走り出してすぐに激痛を感じ、数歩も持たないうちに再び地面へと倒れこんでしまった。そんなときでも非情に血は流れ続ける。朦朧とする意識の中で、小さくなっている自転車を見続けていた。やがて限界になり、眠るように目を閉じそして―。

自転車のベルが後ろで鳴り、何事かと思うと、電車に乗っていた学生だった。

「お、お兄さん大丈夫ですか？お急ぎでしたら乗りますか？」

少年は舞台の袖で演奏を聴いている。のぞき窓から席を見るが、やはり心当たりのある人はいなかった。ため息をついた。前の演奏が終わらなければいいと思った。一曲がとても長く感じられる。時間は迫っていた。

学生は郡司を後ろに乗せると、ひったくりに向かって走り始めた。

「追いついてどうするんですか!？」

「取り返すんだよ、あの、花束じゃないとだめなんだ」

「追いつけ、るんでしょか」

「お前ならできる、ほら、見えてきた、ちかくなってきたぞ、もうちょっとだ」実際、ひったくりはどんな体力を落としていったのか、もう一息というところまで接近してきていた。郡司は何をしているのか自分でもわからないような叫びをあげて威嚇した。ひったくりは驚いて思わず振り向き、バランスを崩した。そのタイミングを学生は見逃さなかった。一気に加速し、ひったくりを抜かした。追い抜き様に、郡司はしっかりと両足で自転車にまたがり、両手を伸ばして紙袋をひったくり返した。逃すまいとひったくりが手を伸ばして郡司の服を掴み、バランスを崩して二つの自転車もつれて倒れた。

車道でやっていった自転車の追跡劇はそこで終わり、周辺の車は急停車し、三人とももつれたが、一番先に郡司が抜け出した。学生はひったくりをしっかりと捉え、郡司に叫んだ。「で、電車での恩返しです、ここは任せて行ってください！」郡司はその言葉を受けて、自転車を一つ取って、その場を去っていった。見落としていた貸しがあったな、と思ったが、それどころではなかった。やがて音楽堂が見えてくる。

郡司がホールに入った時には、少年の演奏は始まっていた。息を弾ませながら、シャツの袖で汗と血を拭い、姿勢を整えようとした。少年の腕前はなかなかのものだった。素人の郡司がわかるほどには上手かった。郡司は愛情をもって視線を注いだが、少年は演奏に夢中だった。

「それだけ夢中なら、さびしくもなかうにな」演奏が終わり、観客の拍手を背に郡司はホールを出ていった。少年はお辞儀をして席を見まわしたが、郡司の姿を見ることはなかった。郡司は音楽堂を出ると、タバコとライターを出したが、手が震えていることに気づいた。少し無理しすぎたか、と思ったつかの間、緊張が解け、めまいがしてその場で倒れた。

少年が控室に戻ると、テーブルに花束が置いてあった。

「差入れの品です」と係員が言った。少年は花束を手にとってみた。紙袋はところどころ破れてしわだらけで、汚れてもいたが、花束はきれいなまま、香りもまだ残っていた。紙袋の底にはケチャップが一袋、貼ってあった。それを見て少年はやっと笑った。

「名前がわからなければお返しもできないな」

## 六

花束を贈ったのはみそろだった。郡司は病室のベッドで寝込んでおり、包帯でぐるぐる巻きにされている。

「花束持っていくだけで、こんなにポロポロになる人もいるんだねえ……」みそろは持ってきた花瓶に花を活けた。

「メッセージカードの一つぐらい、書いてあげればよかったのに」

「名前を教えたら貸し借りの連鎖が始まるしな、それ面倒なのさ。ケチャップの借りなんてそれぐらいで十分さ」



